

子どもの絵のお話

—自由画について—



小さいお子様をお持ちのご両親、幼児の絵は分かりますか。子どもの絵（らくがき）は、自身の「心」を表現しています。子どもは「遊び」が仕事ですから、絵は教えることはできません。自由に描ける環境と、描く「遊びの過程」を大切に。幼稚園は豊かな感性を育て、心を耕す教育こそ目標なのです。

〈目 次〉

はじめに	1
子どもの絵とは	1
感性を育てる時期 子育て中のご両親に	2
望ましい絵を描く環境を考えてみましょう。	2
お父さんお母さんに出来ることは。	2
ぬり絵は過去のこと…とっていたら、世間には何の疑いを持たず、 良いことだと思っている大人がいます。	3
ぬり絵のもたらす害…Q&A	3
子どもが絵を描けなくなる原因を探る	4
絵を描くことが嫌いになるとき	6
社会に潜む結果主義・効率主義（抜粋）	6
形や色を教えてしまう大人	7
描かない子どもの原因と指導	9
わたしたちは、子どもの芸術をどんな風にじゃましているのでしょうか。	10
ぬり絵について	11
切り抜きとお手本について	13
初等教育における創作活動の意義（要約図）	13
すずめの色は何色？	14
おわりに	14
参考文献・引用文献	15

－はじめに－

この冊子では、子どもに与える「ぬり絵の害」を中心にお話しをします。

子どもにとって絵を描くことは、心を伴う表現のあそびですから、教えたり無理に形を描かせようとしたり、描くことを強要すると、子どもはますます描けなくなり、心は開けなくなります。幼児期の豊かな心や活力を育てる望ましい絵画表現の環境は、自由に扱える描画材料と自由に描ける、心を育てる活動場所があることです。

幼児期、児童期の「ぬり絵」は、時間潰しの無感動な労働・作業に過ぎません。精神性の豊かさや創造的活動にはならないばかりか、もたらす害が大きいことは知られています。やがて、絵が描けない子に育ってしまう原因と考えられています。本文では「ぬり絵の害」について内外の研究者の文献を紹介します。子どもの自由画教育から、情操を育む感性教育について考えてみましょう。

－子どもの絵とは－

子どもの絵は自由画であり描く形は自己発見的で、大人から学ぶものではない。従って世界中の子どもの絵画表現には共通性がある。発達段階に即した表現を大切に、自発的な感性教育が幼児の心を育てることであり、造形表現の指導は教えることではなく、自由な表現を援助することに他ならない。援助の方法を、子どもの絵とのコミュニケーションで学習すべきである。

19世紀末、西欧ではすでに子どもの絵は想像的イメージの創造画であることが、子どもの絵の発見者とか美術教育の父と呼ばれるF・チゼックの美術教育観と、心理画はH・レインによって知られていた。わが国で「自由画」は、画家の山本 鼎（著作「自由画教育」、1921年）によって西欧からもたらされた。それまでの大人の描いた手本をまねて描く臨画を排し、写生せよといったのである。自由画とは不自由画に対するもので、自由画とは創造画であると提唱された。その後、自由画の考え方は、心理学者、脳科学者、芸術家、美術教育家らの研究によって、子どもの眼と画家の眼に基本的な違いがあることが分かってきた。子どもの自由画は写生することより、想像画を重視するようになった。創造画の裏付けの証明である。戦後、民主主義教育の流れの中から創造教育を中心とした美術教育の意味や目的が問われ続けている。

子どもの絵を理解するためには、まず子どもの発達段階を知ることである。子どもの脳は、体と共に日々成長しているので、世界中の子どもが、発達段階の年齢に相応しい絵を描き、成長をしていくことは知られている。絵は心を開く表現行為であり、子どもは労働や作業ではなく「あそび」で成長することを忘れてはならない。



3歳9か月



3歳9か月



3歳9か月

－《感性を育てる時期》子育て中のご両親に－

◎子どもの成長には《発達段階》があります。

子どもがそれぞれの発達段階で、絵を描くことを充分に楽しませましょう。発達段階とは、子どもの脳が成長していく過程です。人類の祖先が自分を表現した絵を残したように、人間には表現したい、描きたいという本能があります。子どもは自分の力で、表現することを獲得していきます。

乳幼児、小学校低学年の子どもを持つご両親は、子どもが絵を描く自由画の意味を理解しましょう。子どもの絵の成長は、心の表現と捉えた心理学者、脳科学者、美術教育家、芸術家の研究の裏付けに基づく考え方です。

◎望ましい絵を描く《環境》を考えてみましょう。

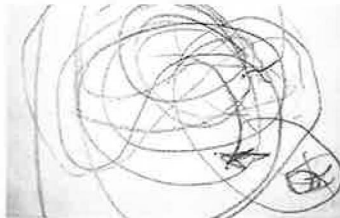
楽しく描く環境とは思い通りに、自由に描けることです。落書きを叱る前に画材を用意してあげましょう。大人の感覚や概念を押し付けなくてそっと見守ることも大切なことです。

子どもは身体の動き、風のそよぎ、音、肌触り、内面の喜び、怒り等抽象的な表現が出来ます。自分にとって重要なものは大きく、強く、詳しく描くはずで、大人の規格にはあてはまりません。大人の尺度で絵の描き方を教えたり、批判すると子どもは描くことをやめてしまいます。感性の芽を摘み取ることにもなりかねません。

子どもは心表現します。(表現例：おたふくかぜ・・・痛いところが絵に現れる。)



1歳誕生日



1歳10か月



2歳7か月

◎《お父さん、お母さんに出来ること》は。

自分の思い通りに描いて、これはおかしいよとか、こうした方が良い等と言われた経験があるのかも知れません。しかし、子どもの絵は想像的（創造）であるべきで、子どもの絵の世界には、科学的な根拠の必要は全くありません。大人の概念を押し付けられた子どもは、絵の中に心の表現を出せなくなります。ぬり絵は、心の表現をこわし、心の成長を阻害することと捉えましょう。

ぬり絵は労働・作業に過ぎません。絵画は塗るという労働ではなく描くという精神活動であるべきです。子どもは遊びで成長することを忘れてはならないのです。

不要になったノートや商品の包装紙・新聞折込広告の裏紙等に落書きを勧めてみて下さい。落書き（楽描き）を親子で楽しく出来る（面白い）といいですね。何も言わず見守り、子どもにお話を聞くゆとりを持ちたいものです。自由に描く環境は、干渉しないことと静かに見守るコミュニケーションといえるでしょう。

◎《ぬり絵は過去のこと》…と置いていたら、世間には何の疑いを持たず、良いことだと思っている大人がいます。

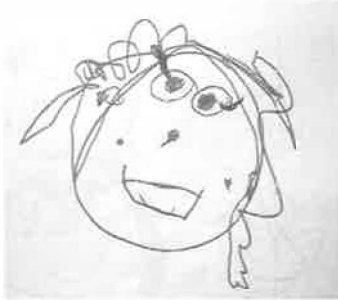
幼稚園で時間が余ったから「ぬり絵」でもやらせましょう。こんな経験はありませんか。

「ぬり絵」をさせれば静かになるから……。取り敢えず昔からやっていたから……。

ぬり絵を遠ざけることは勿論のことですが、子どもの発達段階に沿った教育をする幼稚園や、保育園を選ぶことが大切になってきます。ぬり絵の悪影響を考えてみましょう。



3歳4か月



3歳8か月



5歳3か月

◎ぬり絵のもたらす害…Q & A

『うちの子はぬり絵が大好きです。とてもきれいに描いていますよ。ぬり絵をやっていたら……おとなしく色を塗っていて静かで助かるわ。』

ぬり絵を塗っている限り誰の「非難」を受けることなく安心して描けます？

『綺麗な絵が出来て将来上手になるよ。楽しみね。はみ出さず色を塗るのは大変だけど、何も考えなくて綺麗な絵が出来るから良いよね。』

過干渉とは……。

『あら、何描いてるの。これママで、じゃあこれはパパ。まあ素晴らしいわ。』

『今度はお花描いてみてね。すごいわ……。すてきね。うちの子は天才かも……。』

しかし、ほめられても子どもはやる気は出ません。

描きたいという本能をぬり絵で満足させているのではないのでしょうか。(代用満足)

展示会やコンクールの為の絵にも同様な意味が含まれています。子どもが絵を描くことに目標や結果(評価)を求めるものではありません。

『空の色は青よね、白いところがなくなるまでキレイに塗りなさい。白いところがあると紙がもったいないでしょ。』

『先生やママの言う通りに描くと大人にほめられるんだ。僕は良い子になるよ???』

やがて絵は教えられなければ描けなくなるばかりか、自分を表現することが苦手で消極的になっていきます。

—子どもが絵を描けなくなる原因を探る—

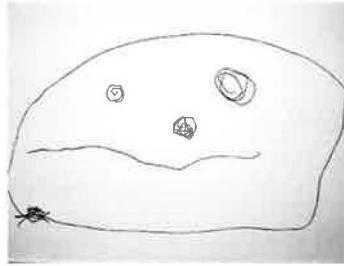
子どもの絵については、これまで様々な角度から研究されてきました。未だに世間に理解されていないことの一つに、子どもの頃に「昔からやっていたよ」という《ぬり絵》の問題があります。子どもの創造性を育むべき時期に「ぬり絵は有害な遊び」であることを、理解して欲しいのです。子どもの世界の創造分野の表現教育は、今日明日に結果は出ない（遠因として考える必要がある）ことを指導者だけではなく、保護者である大人（親）が理解すべきことです。

《ぬり絵・切り絵》と言った類は、現実の一部の教育現場でも行われ、市販されていますが、悪しき風習と言わざるを得ません。原因は指導者（現場教師）や一般の大人が、創造教育に対する《無知》であることですが、だからといってこのことをそのまま放置できません。幼児期の発達過程に、大人概念や、形を教えられた子どもは、自分を表現することが出来なくなるばかりか、やがて自由に絵を描くことを嫌う方向に向かいます。

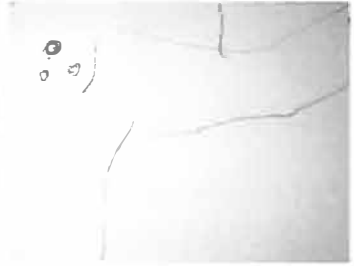
情操・感性教育の観点から教育要領や、保育指針について考えてみましょう。



2歳5か月



2歳7か月



2歳7か月



2歳7か月



2歳8か月



3歳3か月



3歳3か月



3歳4か月



3歳4か月

保育所保育指針、における保育の内容、幼稚園教育要領第2章 ねらい及び内容の中で「表現」においては・・・感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

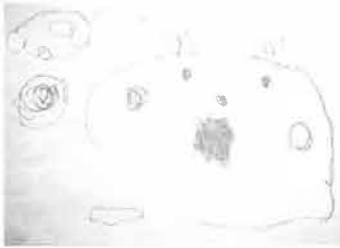
- ねらい・・・①いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- ・・・②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ・・・③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

「表現」の領域では第1章（総則）「3 保育の原理—（1）保育の目標」「（カ）様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」をより具体化したものである。

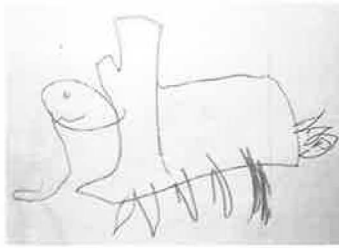
幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容

(5) 表現 ○表現する過程を大切にする

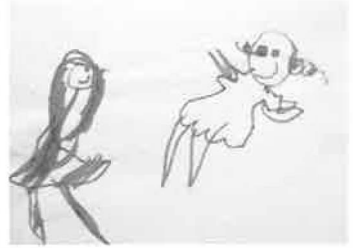
表現とはその結果としての形を高度なものにするものが大事なことではなく、**表現する過程**を子ども自身が**味わい、もっとやってみたく**なることが幼児期の基本なのである。その上で、表現したい微妙な思いを表現の道具や工夫により形にする経験をするよう、教師が助けていく必要がある。



3歳4か月



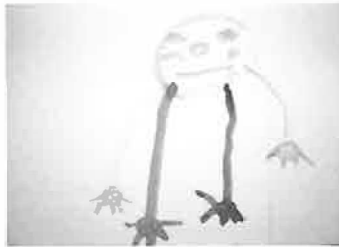
3歳8か月



3歳8か月



3歳8か月



4歳4か月



4歳4か月



3歳9か月



4歳10か月



5歳0か月

1、絵を描くことが嫌いになるとき

〈絵を描くことが嫌いになった理由と時期〉…18歳～25歳男女355名対象2003年アンケートによる

- ・私の隣で描いている友達に「上手に描けているね」と誉めているのに、先生は、私に対しては「もっとここはこうしたほうがいいよ」と注文をつけてくるだけだった(幼児期)。
- ・比べられて自分の絵が劣っていたら、自分も否定されているみたいで悲しくなった。比べられることがなければ好き(小学校低学年)。
- ・強制的に描かされて余計嫌いになった(小学校低学年)。
- ・思い描いた絵と、実際に描いた絵のギャップが激しくて自分は下手だと思った(小学校中学年)。
- ・それまでは、上手や下手に関わらず好きだったが、自分が上手じゃないと自覚しはじめ嫌いになった(小学校中学年)。
- ・絵というものが評価される対象であると感じてしまった(小学校中学年)。
- ・楽しんで描くことよりも、技術を要求されるようになった(小学校高学年)。
- ・まわりの人の絵をみていろいろと考えちゃってから苦手になってしまった。形のあるものを書くのが苦手になってしまったから(小学校高学年)。
- ・「こういうふうには描きなさい」とか先生にいわれて、自分の描きたいような絵が描けなかった。自分の絵より先生の絵みたいになった(中学生)。
- ・自分が気に入っていても通知表の点数が悪かったり、成績が良くなかったから(中学生)。

嫌いになった理由は、年齢によって微妙に異なっていますが、低年齢ほど、大人の言葉や態度によって傷つくことが大きいことがわかります。



5歳2か月



5歳3か月



5歳3か月

2、社会に潜む結果主義・効率主義

どうして多くの子どもが、絵を描くことを嫌いになってしまうのか、その理由を分析していくと、**社会や教育にある理不尽なことや、大人の間違った考え方が**見えて来ます。これは、「子どもの絵を大人がどう捉えるか」という問題ではなく、「子どもをどのように見ようとしているのか」「子どもをどのように育てようとしているのか」という、**社会全体の価値観や教育観に関わる問題**にまでつながるのではないかと思います。先のアンケート(絵を描くことが嫌いになるとき)からもわかるように、いかに大人の言動が、その子の意欲をなくさせていたり、描くこと自体を

奪っていたりするののかということが見えてきます。

子どもは、作家や絵描きになるために絵をかいているのではなく、大人も、絵を通して見方や感じ方、考え方を広げ、豊かな生き方をしてほしいと願っているはずなのですが、**結果主義や効率主義（作品主義）**にまどわされて、**大人が子どもに要求することが結果として、絵を嫌いにさせてしまったり、描かせなくさせてしまったりしているのです。**

これは、その子どもの可能性を摘んでしまったり、一つの生きる喜びを奪ってしまったり、その子の豊かな人生へのマイナスな働きかけになってしまっていることに気づく必要があります。

まわりの大人だけでなく、教育のシステムや有様にもその原因はあるように思われます。しばしば小学校の研究授業というものに参加させていただくのですが、ある授業の後に校長先生がその授業者に「今日の一時間で子どもたちはどんな力をつけたのか、何がマルで何がバツなのか」と聞かれたそうです。図工や美術の一時間の授業でどんな力がついたのか、などということは正直とても難しい問題です。図工や美術で本当につけたい力というのは、これから何年後、いつ現れるのかもわからない、**将来活かされる力**であって、子どもたちが絵を描く過程で絶え間なく拓かれていく豊かな出会いの連続によって、その力はつけられていくのです。

たとえば、筆の使い方がわかったとか、色の混ぜ方がわかったとか、技術や方法の習得がその力であれば、その一時間で答えが出せるでしょう。しかし、絵を通して子どもたちに身につけて欲しいことは、もっと彼らのこれからの人生や生き方に関わる、感じ方や考え方、感性や創造性、主体性に関わる問題であって、むしろ一時間の授業でどうこう判断できないところに大きなねらいがあるはずです。

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 3、だれのための絵であるか | 4、「上手」という言葉でしか評価できない大人 |
| 5、写實的、客観的、視覚的な価値観に支配された大人 | 6、過程でなく結果でしか見ようとしない大人 |
| 7、比較することでしか評価できない大人 | ・・・(3～7の内容は省略) |

8、形や色を教えてしまう大人

子どもが、自分の思いや感動を伝えようとして描いた絵は、いくら色や形が未熟であろうが、見る人の心に伝わるものがあります。子どもが、表現することの満足感を味わうということは、人間として生きる喜びを知ることであり、子どもなりに、芸術的な歓喜を経験することでもあります。

本来、**絵を描く**ということは、**どの子にとっても楽しいこと**であるはずですが、しかし、幼児期から既に描くことが嫌いな子がいるのはなぜでしょうか。それは、その子にとって絵を描くことが楽しくなくなったからです。自然なその子なりの発達を無視されて描き方を教えられたり、ありのままの素直な表現を喜んでもらえなかったり、受け入れてもらえなかったからです。

クラスの壁に絵が貼られたとき、「どうして、ほかの子は人の形が描けているのに、うちの子は、顔から手足が出ているような絵しか描けないの」といって、家へ帰って人の形を教えたという話を聞いたことがあります。また、「自転車はこうでチューリップはこうよ」と教えているお母さんを目にしたことがあります。「子どもの絵は、教えるものではなく育てるものである」といわれています。自然な発達の中で、その発達にそった絵をかけるようになるわけで、そこで形を教えても何も意味はないのです。

幼稚園の年長や小学生になると、ほかの知的なものが発達してくるにしたがって、親や人の目を意識して、まわりと違って自分が同じように描けないことに気づき、白紙のままで何も描かなかったり、ぐしゃぐしゃと塗りつぶしたりする子どもがいます。また文字は描けるのに絵は描かない子もいます。「どうしてうちの子は」と尋ねられますが、それは、2歳なら2歳の、3歳なら3歳のときに、その子の自然な発達にそって、自由にのびのびと描くことをしてこなかったからです。その自然な発達を無視して、突然に胴体から手や足が出て横向きの人が描けるということはないのです。それは発達が遅れているということではなく、その子には**その子の発達がある**ということです。その子のそのときの素直な表現を受け入れてあげることが大切です。教えるのではなく、広告の裏やいらぬ紙でいいので、**どんな落書きでも自由にのびのびと描ける環境**をつくってやるのが大切です。

人の顔や自動車や花を、「ねえ、かいて」とせがまれるとついつい描いてあげるのは人情です。しかしそこは我慢してみたいものです。**子どもの絵と大人の絵は違います**。大人が描いた絵は、所詮、大人の絵であって、まったく違うという前提に立って子どもの絵を見ようとすれば、安易に**形を示してしまうことはできない**はずです。絵を描くということは、文字と違って形や約束ごとを覚えることではなく、**自分の思いを形に表現すること**です。なぜなら本人が創造し作りだすものだからです。大人が形を示しても、それは彼らの創造性を潰すだけです。それを繰り返していくと自分の感覚で働きかけるということができなくなり、その結果、感覚も発達しないということも起こり得ます。これは絵だけの問題ではありませんが、「ねえつぎはどうするの、次は何かくの」という**指示待ちの子ども**が増えてきていると聞きます。自分の目で見て、自分の言葉で話して、自分の考えで表現していく子どもを育てたいものです。子どもが「かいて」というときは「形をかいて」というより、「一緒にかこうよ」ということのほうが多いようです。そういうときは、形を教えるのではなくておしゃべりでもしながら、一緒にそばにいてあげればよいのです。また、今まで描いてあげていたのに、急にそれをやめても子どもは不信感しかいだきません。そのようなときは、できるだけ、その子の発達に応じた影響の少ないシンプルな形を示し、その子が自分から描いていくようなお話をすればよいのではないのでしょうか。

形を教えることと同様に、**ぬり絵も、子ども自身が創造した絵ではありません**。大人の作った概念やパターンを形式的に塗りつぶす作業にしかすぎません。そこからは、子どもの思いは何も聞こえては来ません。同じように、**自分の絵を描けない子を育てる**だけです。自発的に自分から何かを生み出していこうとする習慣をなくしていくことにもなりかねません。輪郭の中をきれいにはみ出さないように塗りつぶすという技術も、**幼児の時期では無意味**です。小学2、3年生になって、指先のコントロールができるようになるころにそれは身につけていくことです。だからといって、ぬり絵に一生懸命になっている子に、「これはいけないからやめなさい」というのではなく、もっとその子が自分から関わっていきたくなることや、楽しいと思える生活や環境を作ってやるのが大切なのです。

また、マンガのキャラクターをそっくり上手に描くことも、それは単なる技術であって、その子の心の表現をそこに見ることはありません。これもまた子どもの問題ではなく、それよりもっと楽しい豊かな生活や、子どもが自ら関わりたくなるような環境を作ってあげない大人の問題です。



3歳9か月



3歳9か月



5歳2か月



5歳2か月



5歳2か月

林 林男編著『表現・幼児造形』〈理論編〉…(原文抜粋引用)

10章、保育での描画指導のポイント…Ⅰ、幼児の描画指導のポイント

描かない子どもの原因と指導

- ①描いた作品を表現の巧みな子どもと比較されたり、兄弟や親に批判された経験をもつ。
- ②作画中に、親の干渉や手の出し過ぎにより自信を失い、自分で考え、工夫する気力を失っている。
- ③友達の絵のまねをして指導者に注意された経験をもつ。
- ④幼児期より指導者や親の手本に描いたものを写し描きをさせられ、劣等感を抱いてしまった。
- ⑤幼少より『ぬり絵』などをしてきたために、大人の描いた形を頼るようになり、工夫する力がなくなっている。
- ⑥なぐり描き（ぬたくりともいう。）を十分にした経験がなく、早くから形の整ったものを要求されてきた。
- ⑦衣服を汚すことを厳禁された中で育てられてきた。
- ⑧幼稚園、または保育園に入るまで筆記用具を持った経験がない。

…Ⅱ、他人のまねをして描く子どもの指導について

- ⑤の『ぬり絵』に起因する。印刷された絵に頼っているのです、頼る形のないところでは周囲の友達の絵をまねしなければならなくなってしまいます。…(後略)

①…なぐり描きの発達過程、W.グレッツィンゲル著、黎明書房、1978

画を描く子どもをもつ両親のための十戒…(P121 前後略、一部抜粋)

四、お手本を見せてはいけません。無理やり自然を教え込んではいけません。

②…芸術による教育、ハーバード・リード著、美術出版社、1979

第四節モンテッソリの自発的表現論…(P131～133 一部抜粋)

モンテッソリ博士は、図画は教えることができないし、また教えるてはいけないといっている。それは自発的活動でなければならず、児童自身の、自己の思想の、自由な表現でなければならない。

2 わたしたちは、子どもの芸術をどんな風にじゃましているのでしょうか。

- ・ぬり絵について、（全文抜粋）
- ・子どもの芸術を手伝ってもよいか？
- ・子どもの芸術は何時もほめるべきか
- ・子どもの芸術は人のきにいらなければならないか
- ・切り抜きとお手本について、（全文抜粋）
- ・間違っているつりあいはおすべきか
- ・子どもの芸術は批評すべきか
- ・子どもの作品を壁にかけてもよいか

好奇心の強い読者は、芸術を導くということより、それを妨げるという議論から話を始めるのは、何故かと問うでしょう。私の確信するところでは、家庭の雰囲気や子どもの芸術にもたらす最大の貢献は、**子どもの自然の成長を妨げない**ということです。たいていの子どもは、おとなさえ彼らを束縛しなければ、のびのびと創造的に、自分自身を表現します。

じゃまといっても両親は子どもの為と思ってやっているのです、じゃましているなどとはつゆほども思いません。たいてい妨害は、子どもの本当の要求を充分理解していないからです。この要求は子どもが成長するにつれて変化します。わたしたちが、自分自身を子どもの位置においてみるのはたやすいことではありません。そのためには、子どもの思考、感情、知覚を知っていなければならないので、教育における、もっとも難しいことの一つになっています。

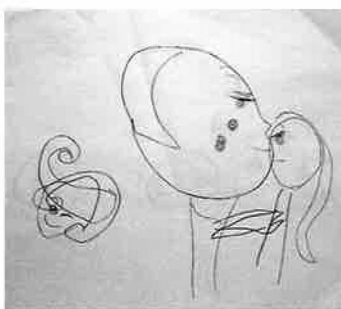
たとえば、なぐり描きをする三歳の子どもは、**紙の上になぐり描きの動作をしているときは全く幸福**です。ところが両親は、子どもがただなぐり描きを練習して自由な動作を覚えなければいけないということを知らないで「何を描いているの？」とたずねたりします。子どもは、何も連想しないで、ただなぐり描きをして、思うままに動作ができるというよろこびしか感じていないので、両親の質問の意味がわからず、何の反応も示しません。**好奇心の強い両親は、なぐり描きの意味も知らないままに、ただよかれと思って、「リング描いてるんじゃないの？」と続けてきます。三歳の子どもは、絵については何も考えていない**ということを知らないのです。子どもは何を言われているのかわからず両親の顔を見守るでしょう。子どもにとって、リングは食べたり、においをかいだり、手に持ったりするもので、絵に描くものではありません。リングの絵を描くなど、この三つの子どもには、まだ想像もつきません。しかし好奇心をおこして、「お母さん描いて」と言うでしょう。子どもに《役立って》あげたいと思って、お母さんがリングを描いてあげると、子どもは両親をよろこばせたいと思ってリングの絵を描こうと思います。もうなぐり描きをやめて、リングの絵を真似しはじめます。子どもには、線の絵など、とても本物とは思えず、ただ何かの輪のようなものがあるとしか思えません。今度、両親がジョニーのそばに行くと、ジョニーは紙いっぱい小さい輪をかいてあるのを見せます。それがなんだかわからず、「それは何？」とたずねると、ジョニーは得意そうに、「りんご」と答えます。

〈ため〉を思っただけのことなのですが、**自分自身を表現したいという子どもの要求を、妨げてしまった**わけです。創造活動、この場合はなぐり描きですが、それがジョニーにどれほど重要であるかを理解したなら、このじゃまがどういう影響を及ぼすか、よくわかるでしょう。ジョニーは自分の腕の動きと、紙の上のなぐり描きの線には関連があることを、発見しようとしていました。動作とその結果との調整は、ジョニーのこれからの成長にとって非常に重要です。彼の重要な感覚のひとつのこの種の調整に、歩き回ったり、手先が器用になったり、あるいは話したりする能力はかかわっていますが、それは舌の動きと、その結果との調整が、ここではとくに重要

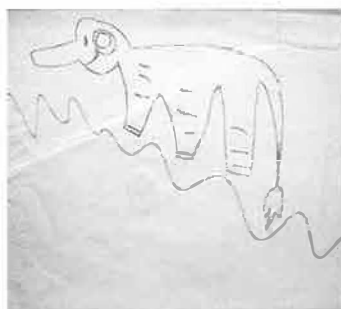
になるからです。

私たちは、子どもが一人で発見することを妨げ、またこういう独立的行動は自信をつけるものですが、それをも妨げました。自分の思うままに線を引くことが出来るという事実からうまれた自信は、子どもにとって重要な経験です。私たちは、子どもからその経験を奪い取る権利はないし、またそれを奪い取ることは、ほかの行動においても、子どもの自信をそこなうことです。

私たちはまた、子どものなぐり描きに対する素直で実験的な接近を中断しました。子どもにきまりきった繰り返しをさせることは、子どもが新しい位置を一人で発見して、たえずそれに適応することを妨げます。こうして、ジョニーは成長したとき、メリーのように、創造活動を利用して、いらいらした時や、いきいきと感じたとき、自己を表現する手段にすることが出来ません。もしも私たちがジョニーをじゃましなかったら、ジョニーはなぐり描きを自然な活動の一つとして続けるでしょう。こういうわけで、始めにこの問題をとりあげたのです。



4歳10か月



4歳10か月



4歳11か月

ぬり絵について

子どもにぬり絵をぬらせることは、子どもの芸術的活動の要求を満足させるために、私たちがとる最も普通な手段です。ぬり絵は普通、輪郭の線だけかいてあって、子どもが中をぬる様になっています。ぬり絵は10セントストアで、たやすく買えるので、子どもに簡単に与えられます。しかしはじめに言うておきますが、ぬり絵は十中八九まで、子どもに、そして子どもの芸術に、ひどい悪影響を及ぼします。ぬり絵の子どもへの影響を理解するために、ぬり絵を使っている子どものプロセスを見ていきましょう。そして、このプロセスが子どもに及ぼす影響を発見しましょう。

子どもがはじめてぬる絵が犬の絵だと仮定しましょう。子どもは、輪郭線にぬっていく仕事をはじめのやいなや自分自身がそれにどうつながりを持っているか、**創造的に解決するのをじゃまされてしまいます**。犬に対する子どものつながりは、愛情であるかも知れません。友情、嫌悪、恐怖であるかも知れません。しかしぬり絵では自分のつながりを表現し、はりつめた喜び、嫌悪、恐怖の感情をときはなすことはできないのです。ヴァージニアの、個性の違いも表わせません。ぬり絵には、ひとりひとりの違いのための準備などはないので、輪郭のなかをぬりつぶすことは、同じタイプの活動におちいらせます。勿論、こんな事は何も知らないジョニーは、生来の不精もあって、犬をぬるのを楽しんでます。しかしクレヨンでそれをぬりながら、自分はこれほど上手く犬を描けないと思います。この仕事を終えたとき、ジョニーはとても得意に思います。とうとう犬をぬりあげた、とのちに、学校かどこかで、何か描くように頼まれると、ジョニーはぬり絵の絵を思いだし、そして、とてもあれとくらべられる絵は描けないと思って、きわめて論理的に「描けない」と答えます。

「でも、私の子どもは、ぬり絵が好きですよ」大勢の先生やご両親はこうおっしゃいます。確かにそうです。ジョニーも好きです。しかし、ふつう、子どもには、自分のためになるものとならないものの区別はつきません。子どもが好きだといっても、それが必ずためになるものとは限りません。たいていの子どもは、野菜よりお菓子が好きだし、またいつでも食べたがります。だからといって、子どもの食事を、お菓子にしなければいけないというわけではありません。子どもは一度世話をされると、それを好むようになります。それにたよりすぎて、もう自由をよるこばなくなります。私は数えきれないほど何度も、両親が何もかも子どもの為にとやっけてあげのを見ました。—— 子どもはただ足をなげだしていると、靴紐がむすばれ、向きを変えると、髪がとかされる —— それはほとんど機械的なくらいです。こういう子が玩具に囲まれながら、それをどうするか知らない、そしてキャンプに行っても、ほかの子が伸び伸びと遊んでいるのに、ひとりぼっちですみっこにすわっている子どもなのです。

子どもは一度ぬり絵に慣れると、自由に創造して楽しむことがなかなかできなくなります。ぬり絵が子どもにうえつける依頼心は、恐ろしいほどです。実験と研究の結果、ぬり絵をぬった子どもの半数以上が創造力、表現の自主性を失い、融通の利かない、依頼心の強い子どもになってしまいました。

先生の中には、ぬり絵は、子どもに、一定の輪郭内を、はみださないようにぬることを教えるとおっしゃる先生があるかも知れません。しかしこれも実験の結果、まったく間違っていることが、証明されました。ほとんどの場合、子どもが自分で描いた絵より、ぬり絵の方が、輪郭線より色がはみでています。もしジョニーが自分の犬を描くとしたら、何のつながりも持たないぬり絵の犬をぬる時より、自分の輪郭から色がはみでないように努力するでしょう。

こうして、ぬり絵は、疑いもなく子どもを、依頼心の強い（子どもが欲するものを創造する自由を与えないので）、柔軟性のない（子どもは与えられたものに従っているだけなので）子どもにしてしまいます。また、子どもの経験を表現させて、その感情をとき放すチャンスを持たせないで、気分的安らぎを与えないし、その上、子どもはぬり絵で表現欲を満たそうとしないから、絵を完成させたいという衝動もないので、絵の技術がうまくなったり、絵の練習になつたりしません。最後に、ぬり絵は、子どもがひとりでは生みだせない大人の概念に、子どもをしばりつけてしまうので、子どもの創造意欲をはばんでしまいます。

V・ローエンルド著『美術による人間形成』竹内 清・堀内 敏・武井勝雄共訳

第2章、初等教育における創作活動の意義、(以下、要約した図) … (原文抜粋引用、本文は省略)

自己表現	模倣
子ども自身の水準による表現	異なった水準による表現
自立的思考	依存的思考
情緒的発散	欲求挫折
自由と柔軟	抑制と束縛
新しい情勢に容易に適応する	決まった型にのみ従う
進歩、成功、幸福	まね、依存、頑固



3歳11か月



4歳4か月



4歳5か月



5歳3か月



5歳3か月



5歳3か月

切り抜きとお手本について

ぬり絵と同じことが、切り抜きとお手本についていえます。切り抜きとお手本はひとりひとりの為に違ったように、つくられていないので、子どもの自然な表現を妨げてしまいます。イースター祭に、私は二年生のクラスに行ってきました。教室のまわりには、イースターの切り抜きをぬったものが、貼ってありました。私が子どもの一人に「アン、どれがあなたの？」とたずねると、うさぎを見まわし、指を口にくわえて「知らない」と答えました。しかし、突然頬を赤くさせて、あるうさぎを指し「これよ」と答えました。「どうしてわかるの？」とたずねますと、アンは親指が汚れていたで、そのあとが付いているからと答えました。汚れがアンの唯一の証明だったので。子どもはただ汚れだけで自分の作品が見分けられるのだと思ったら、私は身ぶるいが出ました。今度は先生に「どれがアンのうさぎですか？」と尋ねると、先生はいくらかいらいした口調で「ひと組に40人も生徒がいます。どのうさぎがアンのだか、わかりっこありません」と答えました。先生は、子どもの為を思っているに違いありません。しかし、先生の教え方はそれぞれの子供によって、それぞれ違った手引きをしているとは言えません。事実この様な教室は全体主義的考えに生徒を導くでしょうし、子どもたちは、その表現方法を組織化されてしまい、皆同じようになってしまいます。個人的違いは許せなくなってしまい、こういう雰囲気なかでは、個人は自分の表現に自信を失ってしまうに違いありません。子どもは、お手本に慣れてしまうと、何時もお手本を期待するようになり、お手本がひっこめられると、どうして良いか分からなくなり、想像力を一人で働かせる自信をなくしてしまいます。

切り抜きが子どもの技術を向上させないのは、ぬり絵が子どもの腕を上げないのと同じです。自分で絵を描いてその線を切る方が、“きめられた” また余り分かり良くない線をきるより、ずっと注意深く出来ます。

すずめの色は何色？

筆者は年長の1年間だけ幼稚園に通いました。園庭でさんざん遊んだ後のお絵かきの時間のことでした。ぬり絵のようなものが配られました。私に配られたのはスズメの絵でした。さて困った。私にはスズメがどんな色をしているかが全く思い出せませんでした。まわりの友達は皆思い思いにクレヨンを選び、せっせと塗り始めています。なかには私と同じスズメの絵を配られた子もいました。その子は茶色のクレヨンを手にもっています。そうかスズメはあんな色だったかもしれない。そう思いはしましたが、私は人の真似をするのは嫌でした。結局私はお絵かきの時間をただじっと席にいて、何もせずに過ごしました。何度か回って来られ言葉をかけて下さった担任の先生も助手の先生も、頑として何もしない子に困惑されたことでしょう。

数十年も前の話ですが、今同様の光景にたびたび出会います。保育の現場では、保育者が指導するうえで困ったと思う子どもにであうことが少なくなりました。実は、保育者が困っているときというのは、子ども自身も何かに困っているものなのです。体験や経験が少ないためにどうしてよいかわからなかったり、混乱しているものなのです。保育者は、このような子どもに寄り添い、内面を理解し、表現を引き出していけるよう、きめ細かなかわりをする必要があります。

そのためには、園という集団の力を適切に働かせることが必要でしょう。保育者は、園という集団の中で複数の子どもたちに接しています。一方で、子どもたちも複数の保育者に接しているのです。

保育者が接する一人ひとりの子どもたちは、それぞれがさまざまな思いを抱えています。

一人ひとりが異なった感性をもっています。その感性の数だけ表現もあるわけです。その子どものもつ思いや表現を理解したり引き出したりするために、集団としての力が作用するとよいのです。チーム保育というような言葉でも表現できるでしょう。

子どもの豊かな表現を導き出すための保育集団のありようとは、一人ひとりの保育者の力が合わさって、子どもたちのためにより柔軟な豊かな環境づくりができる集団であることだと考えられます。

－おわりに－

子どもの絵画表現はこれまで多くの研究者によって、子どもに指図する指導はしないほうが良いことがわかっています。造形表現教育は子どもに対して、自由に絵が描ける場所と道具材料は、心を耕す援助です。指導要領や保育指針にも示されているように、造形表現の「指導と援助」では、指導は援助することと捉えています。

この冊子では、子どもに影響のある「ぬり絵の害」のお話をしました。害があるとは全く思っていなかった方も多いと思います。子どもには無感動な「塗る労働」作業ではなく、心の活動「描くあそび」で成長を見守りましょう。自由な環境に育つ子どもは、自分の心（喜びや悲しみ）を安心して表現することが出来、やがて想像（創造）するイメージ力も育ちます。情操にあふれ感性豊かな子どもの心を育てる努力は、私たち大人のつとめでもあります。

参考文献・引用文献

- 山本 鼎著『自由畫教育』初版・アルス 1921：復刻版『自由畫教育』黎明書房、1982。
- V・ローエンフェルド著『美術による人間形成』竹内 清、堀内 敏、武井勝雄共訳、黎明書房、1963。(p51 一部抜粋引用)
- V・ローエンフェルド著『子どもの絵』勝見 勝訳、白揚社、1956。(pp35～41 一部抜粋引用)
- ハーバード・リード著『芸術による教育』植村鷹千代、水沢孝策訳、美術出版社、1979。
- W・ヴィオラ著『チゼックの美術教育』久保貞次郎、深田尚彦訳、黎明書房、1976。
- ローダ・ケロッグ著『児童画の発達過程』なぐり描きからピクチャーへ深田尚彦訳、黎明書房、1971。(一部抜粋引用)
- 北川民次著『絵を描く子どもたち』－メキシコの思い出－岩波新書、1952。
- 北川民次著『子どもの絵と教育』－親・教師・画家・心理学者との対談－創元社、1953。
- 北川民次著『美術教育とユートピア』－北川民次教育論集－創元社、1969。
- 滝本正男著『北川民次に学ぶもの』黎明書房、1983。
- 湯川尚文著『絵を描く子ども』成文堂新光社、1951。
- 久保貞次郎著『児童美術』初版・美術出版社、1951。：復刻版・文化書房博文社、1990。
- 久保貞次郎著『児童画の見方』新教育協会、1954。
- 久保貞次郎著『児童画と教師』文化書房博文社、1972。
- H・レイン著『親と教師に語る』小此木真三郎訳、博文社、1949。
- トムリンソン著『芸術家としての子どもたち』久保貞次郎訳、美術出版社、1951。
- W・グレッツィンゲル著『なぐり描きの発達過程』、鬼丸義弘訳、黎明書房、1970。
- フィリップ・ワロン著『子どもの絵の心理学』加藤義信、井川真由美共訳、白水社、2002。
- 浅利篤著『児童画の秘密』－誰にでもできる色彩診断－黎明書房、1956。
- 浅利篤著『児童画と家庭』－親と教師のための色彩診断－黎明書房、1956。
- 浅利篤監修日本児童画研究会編著『原色子どもの絵診断事典』黎明書房、1998。
- 香川 勇・長谷川望共著『色彩とフォルム』－児童画の深層へ－黎明書房、1983。
- 香川 勇・長谷川望共著『色彩語事典』－色の単語・熟語－黎明書房、1998。
- 岡田 清著『子どもの絵の伸ばし方』創元社、1955。
- 岡田 清著『工作による創造教育』創元社、1956。
- 岡田 清著『子どものデザイン教育』創元社、1962。
- 岡田 清著『幼児の絵の見方』創元社、1967。
- 岡田 清著『幼児のこころ』創元社、1970。
- 岡田 清著『幼児の絵と教育』－幼年美術論－創元社、1977。
- 大野元明著『絵でわかる伸びる子どもの秘密』実業の日本社、1980。
- 大野元明・高森 俊共著『わが家の小さな原始人』文化書房博文社、1979。
- 高森 俊著『子どもの絵は心』創風社、2004。
- 創造美育協会愛知支部編『原色よい絵よくない絵』黎明書房、1989。
- 片岡徳雄著『心を育て感性を生かす』黎明書房、1998。
- 今泉篤男、小池新二、周郷 博、久保貞次郎、倉田三郎編集『子どもの美術』全4巻、美術出版社、1956。
- E・M・コービッツ『子どもの人物画』－その心理学的評価－古賀行義監修、建邦社、1971。
- K・マコーバー著『人物画への性格投影』深田尚彦訳、黎明書房、1998。
- R・C・バアンズ他著『子どもの家族画診断』加藤孝正、伊倉日出一、久保義和訳、黎明書房、1998。
- H・ヤング著『子どもの描画心理学』深田尚彦訳、黎明書房、1998。
- A・S・ニール著『人間教育・知識よりも感情』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1950。
- A・S・ニール著『問題の子ども』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1954。
- A・S・ニール著『自由の子ども』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1950。

- A・S・ニール著『問題の教師』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1968。
- A・S・ニール著『問題の親』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1959。
- A・S・ニール著『問題の家庭』霜田静志訳、黎明書房、1968。
- A・S・ニール著『恐るべき学校』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1954。
- A・S・ニール著『自由は放縦ではない』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1950。
- A・S・ニール著『ニールの教育』霜田静志訳、大日本雄弁会講談社、1969。
- A・S・ニール著『クビになった教師』堀真一郎訳、黎明書房、1976。
- 霜田静志著『叱らぬ教育の実践』黎明書房、1954。
- 霜田静志編著『問題児の心理と事例研究』黎明書房、1956。
- 霜田静志編著『問題児の発見と治療』黎明書房、1955。
- 霜田静志著『児童画の心理と教育』金子書房、1960。
- 霜田静志編著『問題児の発見と治療』黎明書房、1960。
- カレン・ホルネイ著『自己分析』霜田静志・国分康孝訳、誠信書房、1961。
- 霜田静志・国分康孝編『自己分析を語る』誠信書房、1967。
- 園田正治著『子どもの絵と大脳のはたらき』黎明書房、1976。(p84 一部抜粋引用)
- 久保田競著『手と脳』紀伊国屋書店、1982。(p82 一部抜粋引用)
- 久保田競著『脳の発達と子どものからだ』斎藤公子付言、築地書館、1995。
- 久保田競著『脳力を手で伸ばす』(株)PHP 研究所、2010。
- 時実利彦著『脳と人間』雷鳥社、1968。
- 時実利彦著『脳と保育』雷鳥社、1974。
- 時実利彦著『脳を考える』日本経済新聞社、1968。
- 伊藤正男編『脳と思考』紀伊国屋書店、1991。
- 井上英二、塚田裕三、石井威望編『脳と心を考える』講談社、1980。
- 宮城音弥著『精神分析入門』岩波書店、1959。
- 穂山真人登著『創造の心理』誠信書房、1962。
- M・フォーダム著『子どもの成長とイメージ』浪花 博、岡田康伸訳、誠信書房、1962。
- A・フロイト著『児童分析』北見芳雄、佐藤紀子訳、誠信書房、1961。
- 伊藤廉著『デッサンのすすめ』美術出版社、1968。
- 磯部錦司著『子どもが絵を描くとき』一藝社、2006。(pp91～112 一部抜粋引用)
- 文部科学省『幼稚園教育要領』、厚生労働省『保育所保育指針』チャイルド本社、2008。
- 平田智久、小林紀子、砂上史子編『保育内容「表現」』ミネルバ書房、2010。(p180 一部抜粋引用)
- 林 林男編著、『表現・幼児造形』〈理論編〉保育出版社、2008。(p87 一部抜粋引用)
- 花篤 實・岡田愨吾編著『新造形表現』-理論実践編-三晃書房、2009。(p89 一部抜粋引用)
- 平田智久・小野 和編著 すべての感覚を駆使してわかる『乳幼児の造形表現』保育出版社、2011。
- 野村和子、中谷孝子編著、『幼児の造形』-造形活動による子どもの育ち-保育出版社、2009。
- 扇田博元著『絵による児童診断ハンドブック』黎明書房、1999。
- J・D・オスター、P・ゴールド著『描画による診断と治療』加藤孝正監訳、2005。
- 山形 寛著『日本美術教育史』黎明書房、1967。
- ヴィゴツキー著『芸術心理学』柴田義松、根津真幸訳、明治図書、1971。
- 香原志勢『手のうごきと脳の働き』斎藤公子付言、築地書館、1981。
- 井尻正二著『ひとの先祖と子どもの生い立ち』斎藤公子付言、築地書館、1979。
- 井尻正二著『こどもの発達とヒトの進化』斎藤公子付言、築地書館、1980。
- 湖崎 克著『目のはたらきと子どもの成長』斎藤公子付言、築地書館、1985。
- 南九州大学人間発達学部編著『南九州大学人間発達研究』第1巻～第8巻、2011～2018。

子どもの絵のお話 - 自由画について -

2016年11月初版発行
2018年 5月二版発行

南九州大学 人間発達学部 子ども教育学科
美術教育研究室 古賀 隆一 編著

連絡先：〒885-0035 宮崎県都城市立野町3764-1
電話：0986-21-2111 (代) 学部事務・FAX 0986-46-1051
E-mail: koga@nankyudai.ac.jp
印刷所：株式会社都城印刷 〒885-0055 都城市早鈴町1618番地
電話 0986-22-4392 FAX 0986-22-4891



5歳3か月女児 自由画



—教育研究者の言葉—

- ・ 絵による幼児の教育はあくまで心の育成である。
- ・ 絵は子どもの心をのぞく窓。(岡田 清・美術教育家)
- ・ 絵は心をのぞくメガネ。(平田智久・美術教育家)
- ・ 子どもに学ぶ心の鏡。(大野元明・美術教育家)
- ・ 手を創造的に使おう。(久保田競・脳科学者)
- ・ 幼児の絵は、「もの」ではなく「心」を描く。(高森 俊・美術教育家)
- ・ 子どもの心に自由に起こってくるものを描かせるのがよい。(R・ケロッグ・心理学者)
- ・ ぬり絵による色ぬりあそびは絶対に避けたい。
- ・ 創造活動の妨げになる。(園田正治・美術教育家)
- ・ ぬり絵は利益より害の方が多い、有害な遊びである。
- ・ ぬり絵は創造に必要な自由を阻害する。(北川民次・画家、美術教育家)